

るようであるが、いま問題なのはそのような意味の変化を可能にしたあさましの本質構造である。それを一言でいえば、あさましは対象との距たりの意識である。驚きは対象の意外さに跳ね返された意識の状態であり、軽蔑は対象を異質なものと拒絶する意識である。いずれにせよ主体と対象との間の距離が意識されるとき、あさましという感情が生じる。

それ故、自己をあさましと思うときには、あさましき自己は対象化され、自我が分裂し、あさましと感ずる主体は現実の対象化された自己を拒むことによって主体自身を肯定し主張しているといえる。従って、わが身をあさましと思う主体は自己を対象化する倫理的主体ではあっても、自己を否定して自力から他力へという宗教的主体ではないといえよう。もしそうなら、そして悲しみこそ真宗の信心の基本感情であるとするなら、あさましを真宗の信心に伴う基本感情とみなすことはできないであろう。

六、では真宗の信心において蓮如のあさましという感情は無視すべきであろうか。それはさしあたり教学上の問題であるが、思想的な事実問題として、御文を書く蓮如から御文を読む門徒へ注意を向けると、『御文』のあさましという言葉は本願寺教団に結集した民衆の意識を適切に表現しており、あさましは真宗門徒の信心においては事実上無視できない、と考えてみる余地はあるだろう。中世室町期の民衆は社会的存在を獲得するにつれて高貴なものに對立する卑賤のものとして歴史に登場してくる。この登場に際して民衆はまずその社会的価値を共有する、従ってその支配的価値規準に基づいて自己を下賤のものとして規定し、精神的に自己を対象化し拒むのである。中世の民衆における存在と意識の分裂は、本願寺法主という古い権威を讃仰しながら

かえし一揆争乱において自己の存在を主張していった門徒の、歴史的活動の中にも推定できる。そして『御文』のあさましという言葉が民衆の屈折した意識に表現を与え、それを解き放ち、感情的連帯を生み出すことによって、蓮如は期せずして一つの歴史的生成の胚種となりえたのではないだろうか。

七、もしそう考えてよければ、蓮如は親鸞の信仰に帰ることによって本願寺教団を確立しえた、逆に蓮如のその歴史的成功は彼が親鸞の信仰に正しく帰りえたしるしである、という楽観的な歴史哲学も再考を促がされることになり、信仰と歴史についての反省が再開を余儀なくされることになるのではないか。

(一九七八・一一・一)

『愚禿鈔』の撰述意趣

本学専任講師 江上浄信

『愚禿鈔』は宗祖の真蹟本は伝わらないが、永仁元年に願智が書写したものが最も古く、現に高田専修寺に所蔵せられている。ついで存覚書写本（京都常楽寺蔵）、覚如書写本の転写本（暦応四年本系・新潟浄興寺蔵、正応二年本系・愛知西方寺等蔵）等が伝えられおり、これらは現在最も信憑すべき古写本である。これら古写本の系統や形態については、それぞれ異なるものがあるが、諸本の奥書には「建長七歳（年）乙卯八月廿七日書之 愚禿親鸞八十二歳と記載されている。但しそこに願智書写本、覚如（暦応四年）書写本の転写本には上巻のみに、存覚書写本には上・下巻共に、覚如（正応二年）書写本の転写本には下巻のみに日付を載せている

という相異がある。この中、流布本の底本として普及している存覚書写本が上・下巻共にこの同じ日付をおいているところから、本鈔の撰述年時、更には地位・性格にまで関わる意見が提起せられてくるのである。

先学によく見られる了解は、本鈔は『教行信証』成立の後をうけて、その教義表現の用語や要義を補説開顯したものであって、成立年時に関しては、本鈔の奥書に明示される建長七年八月のことであるとされている。この基本的見解は本鈔の奥書に記されている著作の日付によるかぎり極めて妥当といわなければならない。しかし、村上專精博士は奥書の年時に疑問をいだき、その内容から考察して、本鈔は宗祖が吉水時代に法然上人から相伝した要義の覚書の内容を認め、八十三歳に至って整理されたものであり、その内容も宗祖の己証はなく、自解が主であること等から『教行信証』成立以前と推測され、本鈔独自の特例十条をあげて、所論を裏付けられている。またかかる見解を承けつつ、積極的に村上説を展開されたのが藤原幸章博士であり、本鈔が(一)善導疏の領解を主とする。(二)宗名が用いられていない。(三)下巻には至誠心積が重視されている。(四)無義為義・自然法爾を語る表現に乏しい。という四項を指摘され、本鈔早期成立説の年時については、『楽邦文類』の請来、『般舟讚』の発見年時、更には『聖覚法印表白文』が本鈔上巻にとり入れられている事実注意到し、『表白文』を何時宗祖が知られたかに論究して、文暦二年(一二三五)六月十九日、宗祖六十三歳書写の平仮名書き『唯信鈔』の奥にのせられている宗祖真蹟によるものに求め、本鈔の構想がその頃以降に成ったものと推定され、更に建長七年八十三歳の老後に及んで一書にまとめられるにいたった必然的理由を明かされている。

思うに自ら愚禿と称し、是非邪正をしらず、無慚無愧の身として、凡夫の知見を離れ、偏えに本願の一道に帰せられた宗祖である。いかなる意趣があつて本鈔のような一見図表的難解であり、しかも整然とした教学の体系を備へた撰述をせられたのであろうか。これについては本鈔上巻末に引用されている『元照疏』の

「薄地凡夫 業惑纏縛 流_二転_一五道_二 百千万劫 忽聞_二浄土_一 志願求_二生_一 一日称_二名_一 即超_二彼国_一 諸仏護念 直趣_二菩提_一 可_二謂_一 万劫難_二逢_一 千生一遇_二誓_一 從_二今日_一 終_二尽_一未來_一 在_二処讚揚_一 多方勸誘 所感身土 所化機縁 与_二阿弥陀_一等 无_二有_一異_一 此心罔_二極_一 唯仏証知 是故下_二勸_一信_一 信_二我語_一者 謂_二信_一教_二也 如_二不信_一我十方諸仏_一 豈虚妄乎」

という感銘深い文に留意しなければならない。この疏文は特に『首楞嚴経』「勢至章」引用の部分から掲げられているものである。宗祖にあつては大勢至の智慧を憶わずにはいられたのであつたのである。宗祖は二十九歳で元祖の門に入り、はじめて自力の諸行を棄てて、本願の念仏に帰入せしめられた。それは現実であるとはいへ偶然のようにも感ぜられつつ、その偶然的彼方に必然の因縁をたずねて、そこに遠き宿世における勢至念仏の円通を見出されたのである。かくして、いよいよ自身の遇誓の欲びを疏文に託して表白された宗祖は在所・多方にわたる勸誘の文に、自身の勸信の情をも託されたとも窺われる。疏文は更に「所感身土 所化機縁 与_二阿弥陀_一等 无_二有_一異_一と説かれる。ここに宗祖は即得往生の本義を見出し、念仏往生は念仏成仏である所以を開示するに適わしいものとしてこの疏文を引用されたものと思われる。まことにこの疏文に託して自信教人信知恩報徳の思念を表白し、元

祖の『選択集』の本義を闡明し、浄土真宗の正意を顕彰するのが本鈔撰述の意趣であると窺うことができる。

凡そ宗祖の和文漢文の撰述のいずれもが、自信教人信報仏恩の信仰披瀝でありつつ、その信仰披瀝はその当時の時代や教界、教団の動向に対する宗祖の鋭い批判と深い見識が内在している。元祖の浄土宗独立以来、浄土教に対する法難は度を加え、承元・嘉祿の法難に限らず、聖道諸宗の圧迫は日を追って厳しく、宗祖の胸にひしひしと迫るものがあつたであらう。而して元祖滅後の浄土教界は漸次一念義・多念義に偏する偏見と共に混乱に陥り、元祖の聖淨相對、行々相對の批判は乱れ、諸行の復活に却つて力をつくすこととなり、選択本願の真意は次第に見失なわれていった。建長四年の消息である『末灯鈔』十九・二十通には、元祖の遺弟が師の教義を変じていくのを宗祖は悲歎されている。このことは必然的に真宗教団へも大きく影響し、有念・無念、一念・多念の諍論となり、更に関東における真言・修験の影響をも受け、善鸞の異義をも惹起し、宗祖帰洛後、特に建長年間以降かかる問題に宗祖は苦心されたようである。宗祖晩年に至つて小部の和・漢文の聖教、消息等が数多く撰述されたのはかかる事由を語るものであらう。

かくて宗祖は当時の教界を顧りみつつ、建長三年頃の有念・無念、同七年頃に起る一念・多念の諍論、更には父子義絶という悲痛な事態にまで至らなければならなかった善鸞事件という宗祖自身の信心をも根底から問い直さしめる異義を契機として、自ら師教に聞き、師教に確かめた自身の領解を記録した原典ともいふべき『愚禿鈔』をここにまとめ、一人たりとも信をとれかしと念じつつ付与されたものと思われる。本鈔が師教を『選択集』に即し

て領解した内容をもちつつ、建長七年の識語をもつ所以もこれによつて領かれよう。

而して本鈔付与の対象は、かかる難解な内容を理解し領受しうるような、例へば真仏、顕智、性信等の如き各地門徒の代表的、指導的立場の限られた人々であつたのではなからうか。

空性・法性・仏性

本学専任講師 古田和弘

「空性」と「法性」と「仏性」とは、仏教の教理史の上でそれぞれに大きな背景をもつ語である。梵語仏教圏でも漢語仏教圏でも、そのおのおのについての教義の発達があつた。従つてこれを一括して考えるなどのことはいささか暴挙に過ぎる感なしとはいえない。しかしながら、仏教の思想の底流というか、非常に大きなところでは、この三義は一つに結びついているように感じられる。いま綿密な定義はともかくとして、その素材な語義を整理すると、「空性」は、一切の事物は因縁の和合によつて成り、我とか実体とか称し得べきものはなく、空として成り立っていることをいふのであるから、その成り立ちを「本性空性」として捉えるのである。「法性」は、すべての事物や現象に本来備わる不変なる本性であつて、諸法の「実相」とされ、また「真如」の異名とされるものである。「仏性」は、仏の仏たるその本性であつて、同時にそれが衆生の生死とかかわりをもつとき成仏の可能性として自覚されるものである。「如来蔵」の異名ともされるが、いまはその議論は省略しておきたい。